

江戸時代における文武両道教育の研究 (一)

平 田 宗 史

(平成2年9月10日受理)

(一) はじめに

夏の高校野球のシーズンが終わったが、そのシーズン中に、つぎのような文章に出会うことは、しばしばであろう。例えば、福岡県立東筑高校を紹介して、「明治三十一年創立県内有数の進学校。文武両道で知られ、野球部はその代表的存在⁽¹⁾。」とか、和歌山県立桐蔭高校を「旧・和歌山中⁽²⁾。明治十二年の開校で、文武両道を伝統とする名門。」と紹介している。さらに、高知県の土佐高校について、「文武両道の土佐が低迷⁽³⁾」という表現に出会った。冬のラグビーシーズンになると、山口県立大津高校のラグビー部監督を紹介して、「大学全員進学とラグビー全国三位を両立させ、文武両道を説く⁽⁴⁾」と、また、アメリカンフットボール日米大学親善戦に参加する1693年創立で、ヴァージニア州ウィリアムズバーグにあり、全米で二番目の古い伝統を誇る名門校ウィリアム・メアリ大学のアメリカンフットボール部を紹介して、「文武両立スーパー軍団⁽⁵⁾」と紹介している。

日本人の心の中には、教育の理想の一つとして「文武両道」という考えがあると、みなしてよいであろう。ところが、ここで注目すべきことは、「文武両道」という言葉が、勉強が出来、そして何か、スポーツが出来るという意味に使用されていることである。言葉の中味は、時代とともに変わるの分る。「文」の中味も「武」の中味も時代とともに変化するとみてよいであろう。しかしながら、古武道を極めて人々は、「武術」と「武道」とは異なり、まして、スポーツ武道とは、大いに異なると言うのである。こうなると、今日使用されている「文武両道」という言葉の意味は、江戸時代に使用された「文武両道」という言葉のそれと異なると思われる。

中国では、古来、「右文左武」(文武両道を以て天下を治むる義：『字源』298頁)「有文事者必有武備」(文学の事ある者は、必ず武芸のそなへがある。：『字源』823頁)という言葉がある。日本で

も、古くから、男子の教育の目標として「文武両道(文武兼備)」という考え方があった。しかしながら、奈良・平安時代の貴族男子の理想としては、「詩歌、管絃、和漢才芸」が出来ることであった。鎌倉武士の理想は、「武芸弓馬の道」の出来ることであったのである。すなわち、『伊勢貞親教訓』には、「肝要は弓馬の二なり、此二道を旦夕心にかけ、毎日に怠るべからず」と、『折田左中将義貞教訓書』に、「むかしより今に至るまで、文武二にわかれ、その徳天地のごとし、ひとつもかくるときは、則国をおさむる事有べからず、これによりて公衆には文を持て先とす、詩歌くわんげんの芸これなり、当道には武を持てさきとす弓馬合戦のみちこれ也⁽⁶⁾」とある。これから見ると、武士の多くは、文武両道という考えから離れていたと考えても誤りではないであろう。

しかしながら、鎌倉中期以降になると、武士においても、詩歌管絃の重要性も認められ、室町以降になると、武士の教育理想として、文武兼備が重要視されるようになる。例えば、『早雲寺殿廿一箇條』によると、「文武弓馬の道は常なり、記すに及ばず、文を左にし、武を右にするは古の法兼て備へずんば有べからず⁽⁷⁾」と記されている。

以上の経緯から分るように、武士は、最初は、武芸を重んじて来たが、時勢の進むにつれて、文武兼備を理想として来るのである。文武兼備の考え方は、武士の側から抬頭して来たことに注目すべきであろう。

1600年の関ヶ原の合戦で勝利し、政権を得た徳川家康が、1615年(元禄元)年7月7日、『武家諸法度⁽⁸⁾』を出し、武士のあるべき姿を申し渡したのであるが、その第一条で、「文武弓馬之道專可相嗜之事」と記し、そして、「左文右武古之法也。不可不兼備矣。弓馬者是武家之要枢也、号兵為凶器、不得己而用之、治不忘乱、何不励修練乎」と註している。以上のように『武家諸法度』の中で徳川家康が定めたことは、戦国時代も終り、武士が支配者階級として安定してきたことを意味しているのであろう。

文武は車の両輪、鳥の両翼の如くという考えが武士の通念となってくる。17世紀後半から18世紀前半にかけて、各藩では、藩士の子弟の教育のため、藩校を設置してくる。文武両道を教育の目標として掲げるところが多くなるが、具体的な目標、内容、方法等において、時代および藩校によって差がある。

本研究の目的は、藩校教育において文武両道教育が、何時ごろから、如何なる目的で、如何なる内容および方法で行なわれたかを各藩校をひとつひとつ点検し、文武両道とは何であったかを考察することである。それを、先ず、筆者の祖先が学んだ宮崎県にあった高鍋藩の藩校の教育から検討してみよう。

(注)

- (1) 『朝日新聞』(朝刊) 1987年8月4日 15面。
- (2) 『朝日新聞』(朝刊) 1983年7月10日 18面。
- (3) 『読売新聞』(朝刊) 昭和59年2月6日 7面。
- (4) 『読売新聞』(夕刊) 1989年1月6日 3面。
- (5) 大正6年、講堂館に入門し、2年後、22歳で中学修猷館の柔道教師として赴任、昭和20年3月まで、柔道を指導した西文雄氏は、『柔道は武術』と、ポイント柔道に傾斜していく日本柔道界を厳しく批判したと言う。(『西日本新聞』夕刊 1990年9月3日 11面)
- (6) 国民精神文化研究所『日本教育資料書』第二輯 昭和12年3月28日 84頁。
- (7) 同上書 85頁。
- (8) 同上書 104頁。
- (9) 『徳川禁令考』第一帙 第14章 90頁。

(二)高鍋藩の文武両道教育

現在の宮崎県は、江戸時代、延岡藩、高鍋藩、佐土原藩、飫肥藩の四つに、ほぼ分れていた。高鍋藩初代藩主秋月種長が、1587年(元正15)年8月、豊臣秀吉の命によって、筑前国秋月から櫛間(宮崎県串間市)へ移封された。関ヶ原の合戦ではじめ西軍に、のち東軍に与した種長は、3万石を安堵され、1604(慶長9)年11月、居城を櫛間より財部(高鍋町)へ移した。その領内は、高鍋(13郷27村)を中心として、飛地の福島(8郷18村)、諸県(4郷9村)であった。種長の後、種春(二代 1614～1659)→種信(三代 1659～1689)→種政(四代 1689～1709)→種弘(五代 1709～1734)→種美(六代 1734～1760)→種茂(七代 1760～1788)→種徳(八代 1788～1807)→種任(九代 1808～1843)→種殷(十代 1843～1871)と襲封した。五代種弘までは、家督紛争、一揆多発などで、財政事情は悪く、幕府から三千両を借金したほどであった。六代種美になって、財政再建の目途がつき、七代種茂になって、財政も一応確立した。彼は、「まず政務を統一するため総奉行を新設し、新田開発をすすめる、藩直営の木材、木炭、紙の生産、朝鮮人参の栽培等積極的な打開策を推進した。また法令十一條を定

め綱紀の肅正を徹底し、一応の成功を収めた。⁽¹⁾」と言われている。彼の治政中の大きな仕事の一つは、その他、1778年(安永7)年2月24日、藩校である明倫堂を建設し、開講したことである。

明倫堂開設以前の高鍋藩の教育については、つぎのように記してある。

「旧藩儒學ノ行ハルハ寛永年間舊藩主長門守種政属邑福島縣ノ處士山内仙介ヲ辟セシヲ以テ始トス兵学ハ元禄年中同人佐久間頼母助ヲ聘セルヨリ始レリ然レトモ未学校ノ設ニ及ハス其子長門守種弘始テ稽古所ヲ城内ニ設ケ文學武芸日ヲ分テ教演セシム其子長門守種美更ニ金穀ヲ給シテ費用ヲ資ケ時ニ親臨シテ其勤惰ヲ察シ之ヲ勸懲ス又僻陋學術或ハ誤アラシコトヲ恐レ藩中有志ノ子弟ニ學資ヲ給シテ京師ニ遊學セシム其子右京亮種茂⁽²⁾學ヲ好シ儒臣千手八太郎カ議ヲ用井始テ別ニ明倫堂ヲ造リ文武ヲ區別シ子弟毎日授業スルヲ得安永七年二月ニ至リテ落成ス」

これは、旧高鍋藩の明治になってからの文部省への報告である。この報告書によると、儒学は、第4代藩主種政が、1707(宝永4)年、山内仙介(山内貞良幼名次郎吉又稱竹右衛門後仙介)を中小姓格三十石で召出し、儒学を講ぜしめたるのに始まるとする。兵学は、第三代藩主種長によって、1686(貞享3)年、二百石で召抱えられた越後流

の軍学者佐久間頼母が、1693（元禄6）年、高鍋に来訪してから始まる。

以上の二人によって、僻遠の地高鍋藩にも、儒学及び兵学の種が蒔かれた。その蒔れた種は、第5代藩主種弘によって育てられる。彼は、頭脳明敏で学問を好み、先代種政の師事した内藤九右衛門有量を、1712（正徳2）年、高鍋に招いた。そして、翌1713年、城内廉の屋敷にて定日に兵法、武芸の稽古をすることとした。さらに、2年後の1715年には、「本藩の家臣は少しとしないが、すぐれた役人の乏しいのは、奉公の心掛けがよろしくないのと人物の選出が適切でないからである。武芸、筆道、算法いずれにても、父兄は子弟の才能を成就させるよう指導監督し、人材の錬成に勤めねばならない。」⁽³⁾という諭告を出した。その後1719（享保4）年6月、新小路の内田新之丞の元屋敷に学問武芸の稽古所を置くと同時に、人材を江戸に遊学させる方策もとられた。

第六代藩主種美になると、高鍋藩の教育は、さらに発展した。彼が、家督を相続した翌年の1735年の藩内総人口は3万4900人とされているが、その年から、経費と兵書の隔日進講の制を定め、家臣に陪聴させ、1743年7月、兵書、経書、故実、武芸の稽古日を増した。彼は、学問、武芸などに熱心で、藩士の子弟に、それらを奨励したのである。

1760（宝暦10）年7月8日、父種美の隠居により、種茂が第七代藩主となった。その時、18才である。彼は、1788（天明8）年11月6日まで、藩政を司どり、その間、人材を登用し、家臣の献策に耳を傾け、高鍋藩の黄金時代を作り上げた名君だと言われている。教育改革にも積極的に乗り出した。彼は、「徂徠学ヲ修メ詞章ヲ好ム」傾向にあったが、藩士千手八太郎から、「其治国ニ益ナキコトヲ諫メ」⁽⁴⁾られ、「遂ニ宋学ニ帰セシ」むこととなった。そして、角の屋敷稽古所においての経学、兵学の講義を強化し、1765（明治2）年には、藩士が元服し御目見を願い出た時、または、家督相続によって御番入を願い出た場合に、大目付以上の者が、出席状況と成績を調査することとなった。それでも、出席状況が悪く、教育の成果が上らないことから、財津十郎兵衛と内藤進の兩人が、1775（安永4）年、学校建設の進言がなされたが、しかし、それは、受け入れられなかった。2年後の1777（安永6）年6月17日、前記の千手八太郎は『学校⁽⁵⁾造立の存寄』を藩主に提出し、学校設立を願い出た。

この建白書によると、作成者自身が「廉之屋敷

稽古所ニ而御家中諸生之為ニ經書講談仕候様被仰付」⁽⁶⁾られているが、どういう理由か分らないけれども、「出席之徒少ク格別出精之徒モ稀成様子ニ御座候」の様子である。しかしながら、微力ながら努力した結果、少しは「生徒も相増出精之人も有之候様」であるので、ちゅうちょするが、思いつくところを申し上げますと、彼の考えを四項目にわたって記している。それを要約してみよう。

一、経学は、「事物之道理を講求仕心身性情を正し養立候義故深沈ニ無御座候而は学業成立不申候儀故」に、学校は閑静のところを選ぶ必要がある。ところが、講書が行なわれる稽古所は、「往来に立臨み騒敷場所ニ而御蔵日等は人馬多く入込み別而騒敷且諸稽古打込之稽古所故講書中ニモ外稽古之徒相集り居咄等有之旁講生之心不安静候故其心義理に移り不申幼年之輩は別而心散り安ク」なると理由で閑静な場所に、新に、学校を造立すること、

一、学校の造立がうまく運ばれたら、「道德全備之賢儒老人御招被成度」ことと、そういう人物を即座に得ることが出来ない場合には秀才を選び遊学させて養成すること、さらに学校の修覆、書物の購入、その他必需品の費用を学校の予算で賄ふこと。

一、学校は、小学と大学に分け、領内各所に小学、そして、城内の廉之屋敷に小学、大学を設け、小学では、二人の師範を任命し、「手習素読諸礼等を教小学家礼等之講書仕孝弟忠信礼讓廉恥之道を説聞セ」、大学では、「窮理尽性三綱八目之功夫を成し修己治人治国平天下之ニモ達候様教導被仰付度奉存候」こと、しかしながら、領内各所に小学を一時に設けることが出来ない場合には、城内に小学、大学を先ず設け、次第に領内の小学を設けるようにすること。

一、経学は、「最初より好候而学候者は少御座候間各勝手ニ御任せ被成候ニ付は学候者少ク御座候間」という理由で、「御上ヨリ御家中諸士之子弟一統ニ学校ニ罷出経学仕候様其他農家之者も農隙ニ是在々之学校ニ罷出相学候様被仰付度奉存候」こと。

以上の4項目にわたって提案し、彼は、最後に、「御時節柄御物入多折節ニは御座候得共人材教育之儀は御家中風俗之盛衰国家之治乱に預り候大切之儀ニ御座候之間格別之思召を以」⁽⁶⁾って、その4項目の実現を願い出たのである。

千手八太郎の進言で注目すべきところは、小学と大学の設置、小学は一ヵ所ではなく領内数ヵ所に

設置すること、それらの学校へ農家の子弟も入学し学ぶこと、そして、学校の経費を藩費で賄うことを提案していることである。

彼の進言は受け入れられ、学校費用として20人扶持と定められ、つぎのように、学校建設担当役人が任命された。

「家老稽古大都合	手塚甚五左衛門吉言
用人稽古仲都合	手塚忠太左衛門吉達
総奉行	鈴木丹左衛門照房
物頭稽古改役	河辺弾右衛門直貞
物頭勘定奉行	坂田宇平次諸安
師範	財津十郎兵衛吉恵
同	千手八太郎 興欽
同	山内富太郎 貞昌
大匠	野口善四郎 重幾
同	大山善五郎 ⁽⁷⁾ 」

進言のあった翌年の1778(安永7)年2月、校舎が完成し、それは、「明倫堂」と名づけられ、24日に、盛大な開講式が行なわれた。その時、藩主種茂の臨場があったのは言うまでもないが、進言者の千手八太郎等の師範の講義始めが実施された。

全国の藩学設立の状況をみるに、石川謙の調査によると、表(二-①)の通りである。

この表によると、藩学の設置の早いところでは、1661～1687年の間に4藩、1688～1715年の間に6藩、1716～1750年の間に18藩、と徐々に、藩学が設置され、明倫堂が設置される1751～

1788年の間は50藩と、急増する。その後も、その勢は止まらない。すなわち、全国的状況から見ても、明倫堂が設立された頃は、全国の藩が、人材育成のために、藩学設立を考えはじめた時期である。

藩主種茂は、明倫堂に対する期待が大きかったのか、自ら『明倫堂記』を書き、建学の趣旨を明らかにした。そして、それを板額に書いて講堂に掲げた。それは、漢文で書かれ、引用するには、長いので、それを要約してみよう。

「古の君主は、治国のために、教学を先にした。すべての名君は、『風俗ヲ正シ賢オヲ得ルヲ以テ本ト為ス』ことを治政の基本とした。そのために、『学ヲ建テ師ヲ立』てたのである。

予の祖父種弘は、はじめて稽古所を設けて学問を奨励し、予の父種美は、それを継承し、一層奨励した。また、当藩が西の僻陋にあるので学問の遅れるのを心配して、有為の子弟を中央に派遣し、正学を学ばせるようにした。

予が家督を受けて約20年経過したが、父の意を承け、『国中ノ士民ヲ教フルニ孝弟仁儀ノ道ヲ以テス』るのを方針としたにもかかわらず、予の力不足で、『教化年ニ弛ミ、風俗歳ニ衰ヘテ嚴君ノ善政マサニ荒廃ニ至ラントス』るのである。予は、これを『深い慚懼ス』るのである。

近頃、予の賢友である千手八太郎が、それを是正するため、『学堂ヲ改メ作ツテ其規模ヲ広メ』るよう進言してくれたが、それを入れて、

表(二-①) 藩学設立の情勢

	関 東	奥 羽	中 部	近 畿	中 国	四 国	九 州	合 計
寛文～貞享 1661～1687		1			1		2	4
元禄～正徳 1688～1715			2	3		1		6
享保～寛延 1716～1750	3	2	2	3	4	2	2	18
宝暦～天明 1751～1788	2	7	10	5	9	2	15	50
寛政～文政 1789～1829	15	12	15	20	7	7	11	87
天保～慶応 1830～1867	14	5	16	13			2	50
明治(元～4) 1868～1871	11	3	7	13	1	1		36
年 代 不 明	4							4
合 計	49	30	52	57	22	13	32	255
藩学の存否 不明の藩	4	2	5	2	5		3	21

注 長田新監修『日本教育史』御茶の水書房 1964年10月30日 107頁による。

城内に学堂をつくり、小学と大学に分けて、年令に従って学習せしめる事にし、年経費として米35石余を支出することにした。

これは、『祖業ヲ紹ギ邦家ヲ保ツノ道、其ノ要ハ、此ニ在ル故ナリ。』と考えるからである。したがって、予の意を受けて勉勵するように。ここで学ぶ学問は、朱子学に基づいて孔孟の道を求めることである。

国を治める本は君主にあるが、それを補佐する人々が有能でなければ、『治平ノ功ヲ致ス能ハザル』ことなので、人材を養成するため学校を設置するのである。それ故、政治の本は、学校、すなわち教育にあるのである。このことを、この堂（学校）で学ぶ者は、銘記して、努力勉勵するよう努めてくれるように。

安永七年仲春の二月二十四日学堂落成し、それを名づけて明倫堂とする。大蔵種茂謹んで記す。⁽⁸⁾

以上の内容のような『明倫堂記』を藩主種茂自から記したのであるが、藩主の意気込みが感じられる。

開講とともに、明倫堂生の日常の生活の規範を定めた『明倫堂学規』も作成された。それは、18

の徳目を掲げ、その徳目に注釈をつけたものであるが、徳目だけを掲げてみよう。

「入学必ズ制アリ

凡ソ此ニ学ブ者ハ必ズ塑望ノ儀ヲ嚴ニス

晨昏ノ礼ヲ謹ム

居處必ズ恭シク

歩履必ズ正シク

視聽必ズ端シク

言語必ズ謹ム

容貌必ズ莊カ

衣冠必ズ整フ

飲食必ズ節ニス

出入必ズ省ル

読書必ズ專一

文字ヲ移ス必ズ措敬

凡案必ズ整斎

堂室必ズ潔淨

相呼ブニ必ズ齡ヲ以テス

業ヲ修ムル余功アリ、藝ニ遊ブ、性ニ適フコトアリ

幼者ヲ待ツニ慈ヲ以テシ、長者ニ事アルニ悌ヲ以テス⁽⁹⁾

これをみると、明倫堂生の行住坐臥を厳しく律

表（二-②）高鍋藩士の格（諸士・組外・奉公人）

格（諸士・組外・奉公人）	
給 人	（凡60～300石）世襲と一代の給人がある（上士）。
小 給	（凡30～ 60石）もと大小姓。世襲と一代の別がある。
中小姓	（凡15～ 50石）御床几廻ともいう。世襲と一代の別がある。
徒 士	（凡10～ 37石）世襲と一代がある。
組 外	
足 輕	用人預と者頭預に分けられ、それぞれ御組・鉄砲組・長柄組などに分けられていた。また美々津と福島には地足輕があった。
手 廻	小頭・道具者・挾箱者・草履取・馬屋組
職 人	普請方組・細工組
雑 役	
ほかに	医師・茶道

注 木村礎他二人編『藩史大事典』第7巻の九州編
雄山閣 昭和63年7月5日 501頁による。

表（二-③）高鍋藩の上中下三階層別知行高表

階 層 \ 項 目	人 数	知 行 高	人数比率	知行高比率
上級（小 給 以 上）	9 5	1 0, 1 8 9 石	7	4 3
中級（中 小 姓 徒 士）	3 2 2	6, 3 5 6	2 3	2 7
下級（組外諸奉公人）	9 4 4	6, 7 3 8	6 8	2 8
寺 社	2 7	6 9 6	2	2
合 計	1, 3 8 8	2 3, 9 7 9	1 0 0	1 0 0

注 石川正雄「高鍋藩の歴史」『宮崎県地方史研究紀要』（第二輯）による。

しているのが、分るであろう。明倫堂は、「新建₍₁₎学₍₂₎堂₍₃₎、而新₍₄₎藩中之耳目₍₅₎、一堂中分₍₆₎小大₍₇₎二₍₈₎学₍₉₎、曰₍₁₀₎行₍₁₁₎習₍₁₂₎館₍₁₃₎、曰₍₁₄₎著₍₁₅₎察₍₁₆₎館₍₁₇₎。総₍₁₈₎其₍₁₉₎堂₍₂₀₎名₍₂₁₎明₍₂₂₎倫₍₂₃₎堂₍₂₄₎。」と記してあるように、小学と大学とに分れ、小学を行習斎、大学を著察斎とした。⁽¹⁰⁾

小学の行習斎には、初めは、給人、小給の長男が7〜8才で入学し、そして、それ以下の身分である中小姓、徒士の長男はなるべく出席すべき事であった。しかし、後に就学が仕籍に入る条件となったため、2男以下でも11才までに必ず入学しなければならないこととなったのである。また、願い出れば、徒士以下の身分の者でも、出席できた。⁽¹¹⁾

入学を希望する者は、先ず、父兄の許を受け礼服を着て教授、助教授の宅へ参上し、願い出た上で、許可されて、麻上下着用して出席するのである。毎日早朝、身仕舞した後、兼ねて頼み置いた師家の下へ行き素読を受け、それから一旦自宅に帰り朝食した後、午前八時登校、九時始業である。教授助教授などの先生方には、一礼し、座席は、「入学之前後ニ拘ハラズ一統長幼ノ序ヲ以テ序席可致事」とされていた。⁽¹²⁾ 教えられる教科は、つぎの通りである。

素読

孝経、小学の内編外編、大学、論語、孟子、中庸、近思録、詩経、書経、易経、春秋、礼記、

講義

孝経、小学内外編
外に礼式、書道、数学が授けられた。
午後3時に終業する。⁽¹³⁾

試験は(1)漢籍の句読(素読) (2)書道 (3)背誦(暗記)が行なわれ、これらを行習斎三事試と言われていた。その外、希望者は、四季に一回、講義試験が行なわれた。

規定の試験に合格すると、大学の著察斎へ進む。著察斎の学生は、「自ら講読したり、人と会読したり、教授への質疑なども自由にし、典籍も、経史子集その欲するに任せ、あらかじめ科目を設

けない。教授は、五十の日を教官会議の定日として学事を議し、その他の日は、午後二時から諸書の講義を行った。学生はその聴こうと欲する講義を選んで聴いた。」のである。⁽¹⁴⁾ そして、一般的には毎月六回、講書を聴き、30才を退斎とされた。

儒学を教える明倫堂が設立され、儒学教授が充実されたとは言え、武術が無視されたのではない。藩士の子弟の教育において、武術も重視され、それは、稽古所で行なわれた。それは、何才から、どの程度、なされたかは、現在、詳かに出来ないが、つぎのような武術が教えられたという。

兵学 越後流、長沼流、後に西洋流

弓術 騎馬以上(給人、小給)の子弟は日置流雪荷派、それ以外は印西流

馬術 大坪流、調息流、禄百五十石以上の藩士は乗馬を持たねばならなかった。

槍術 種田流、後に大島流も。

剣術 雲弘流、心影流、大石神影流、津田一伝流、示現流、淵水流、武備志流、後に大石神影流と津田一伝流を当藩流とし、その他を廃した。足輕に大示現流、俗に御家流を学ぶ者もあった。

砲術 中島流、武衛流、自得流、後に西洋流。

柔術 宝山流、揚心流、笹下流、天音流、

長刀 月山流、福島に飯笹流。⁽¹⁴⁾

先ず、これを見て驚くことは、それぞれの武術の流派が多いことである。それと、「小給以上は、文学(儒学)兵学弓馬剣槍を必ず学び、中小姓、徒士は文学、剣術、長刀を兼ね学ばねばならない。」とあるように、文武の中、文においては、藩士の身分差に応じた、教育内容の差はなかったが、武においては、身分差に応じて、それがあったことは注目される。

その後、1844(弘化1)年8月28日、明倫堂に医学館が付設されたり、1853(嘉永6)年9月26日、寄宿舎である切俣楼が設けられたり、1869(明治2)年に国学科が設けられたりして、時勢に応じて、明倫堂は、充実、整備される。

(注)

(1) 藩史研究会編『藩史事典』秋田書店 昭和51年5月25日 519頁。

(2) 文部省総務局『日本教育史資料』参 明治23年10月30日 254頁。

(3) 石川正雄編『明倫堂記録』宮崎県高鍋町 昭和58年3月30日 1123頁。

(4) 『旧高鍋藩先達小傳』(高鍋町立図書館蔵)

(5) 石川正雄「高鍋藩の教育」『宮崎県地方史研究紀要』第三輯 宮崎県立図書館 昭和52年3月31日 22頁。

- (6) 前掲書『明倫堂記録』 22～24 頁。
- (7) 都合（つごう）という役名は、特定の任務の長官をいう。しかし、大都合、仲（中）都合を設ける場合は、大都合が長官、仲都合が補佐役である。稽古改役は管理者に相当するという。（同前書『明倫堂記録』 1127 頁）
- (8) 高鍋町公民館『明倫堂記その他』 昭和 30 年 3 月 3～8 頁。
- (9) 同上書 8～11 頁。
- (10) 前掲書『明倫堂記録』 25 頁。
- (11) 同上書 88 頁。120 頁。
- (12) 「行習斎規」に、明倫堂生の日常の行動が定められている。（同上書 32～34 頁）。
- (13) 前掲論文「高鍋藩の教育」 16 頁。
- (14) 同上書 17 頁。